

メリッサ・M・シュー、キンバリー・K・ガーチャー著／三木那由他、西條玲奈監訳  
(フィルムアート社、2024年)

## 女の子のための西洋哲学入門 思考する人生へ

槇野 沙央理\*

知識は私たちを守ってくれるか？ 知識は私たちに見合う尊厳があることを教えてくれるだろうか？ 知識は私たちを、伝統から救い出しながら伝統へと向かわせてくれるだろうか？ 私たちを身軽にしてくれると同時に自発的に引き受けたい指針をも与えてくれるだろうか？ (引き受けざるを得ない指針に向かわせてくれるか？) 知識は私たちを本当に破壊的にしてくれるだろうか？ 私たちは、哲学という営みに身を委ねることで、この世界をよりマシに生きることができるだろうか。

『女の子のための西洋哲学入門』は、これらの問い(厳密にはプレッシャー)に応じようとする、日本語では稀少な一冊である。所収された諸エッセイは、マイノリティ属性が相対的に強い人々の言葉や経験を掘り取ることで、哲学がまさにその哲学らしさを獲得する方法(普遍性・客観性・自律性のヴェールをまとう言葉使いを行使する権限)にある種の勇気を持って放棄しようとする。その様子はまさに、哲学という学問領域が、自身をストリップする過程そのものに見える。言い換えれば、哲学が哲学というもっともらしい見かけを獲得するプロセスそのものを作り変えようとするように思われるのである。

本書の構成は、全四部・合計20章からなる。編者のシュー&ガーチャーによると、それぞれの部は、「自分とは何か」、「知識とは何であり私たちはいかにしてそれを求めるのか」、「社会構造や権力関係はいかにして私たちの現実をかたちづけているのか」、「私たちの行為や態度に関する倫理」(49-50頁)と特徴づけられる。もし、既存の学問領域において典型的なテーマや、それぞれの章のアプローチに着目して捉え直すなら、以下のように言えるだろう。第Ⅰ部では、伝統的な哲学の問題とされてきた「同一性」・「徳」・「自己知」等々のテーマへのフェミニズム的なアプローチが展開さ

れる。第Ⅱ部では、そもそも哲学が前提としてきた科学的・学問的方法論がどのようなものであったかの捉え直しと新たな提案がなされる。第Ⅲ部では、「人種」・「ジェンダー」・「クィア」といったフェミニズムに関連ある諸概念および実践が、哲学的な思考法や道具立てを活用して論じられる。第Ⅳ部は、前Ⅲ部よりさらにハイブリッドな印象を与える。そこでは、想像力や感情の働きを分節化することを通じて世界へと応答しようとする者たちへの倫理が語られる。

本書が学際的な取り組みであることは論を俟たず、哲学の営みにフェミニズム的な観点からの見直し、つまり哲学がフェミニズム的な観点を内在化することが必要であるという認識を与える。この内在化のプロセス——私なりの表現をするなら、哲学が哲学というもっともらしい見かけを獲得するプロセスは、個々の語り手によって模索され、解体され、形作られようとしている。

例えば、第Ⅲ部第12章「言語——コミュニケーションでの集中攻撃」(エリザベス・キャンブ著、三木那由他訳)を取り上げよう。ここでは、記述と評価との区別を(実践的にも概念的にも)困難にする「厚い語」(338頁)が、誰かしら「ターゲット」をその人々に相応しいとされてきた「場所」に位置づけ、うまく適合しない人々を非難するもので(337-338頁)あることが人種およびジェンダーにまつわる具体例を挙げながら論じられる。例えば、かつてアフリカ系アメリカ人に対して頻繁にぶつけられてきた「小僧<sup>ボーイ</sup>」という言葉が、白人に対して従順で未熟な存在であることを、ターゲットに要請してきたことが取り上げられる。ところがキャンブによると、人々を抑圧する方法は、誰かを抑圧しようとする話し手に対する逆襲の手段ともなりうる。哲学者のポール・グライスによって考案された「推意」は、偏見を利用して

\* 立教大学非常勤講師

他者を侮辱する会話のメカニズムを解明すると同時に、言葉の解釈を行うという責任を聞き手が話し手へと打ち返す可能性、相手のやり口を利用して相手をやり込める余地があることを示唆しているという。(グライスの専門家である三木によって施された訳注は、丁寧で親切である。)

キャンプの「言語——コミュニケーションでの集中攻撃」における実際の言語使用への態度は、古典的な言語哲学の議論にしばしば見受けられがちなものとは異なっている。そうした議論において、実際の言語使用における力関係はほとんどまったく考慮されず、それどころか、力関係を排除して言葉の意味を捉えることが当然だ(常に成り立つ)と暗黙裡にみなされてきた。それどころか、言語哲学の理論が扱う言葉にヴァリエーションはほとんどなかった。語であれば名詞、文であれば陳述文が典型とみなされた。これらのことから一歩踏み込んで述べるなら、古典的な言語哲学の理論は、標準的で、整っていて、本来あるべき姿・形をした言葉が存在するのだというメッセージを送り続けてきたのである。(この伝統に対する批判は、ジョン・オースティン(1975, Lecture 1)を参照のこと。)だがキャンプは、理論に都合のよい言葉を標準形とするのでなく、問題としての言葉自体に寄り添っている。キャンプのエッセイは、既存の理論によって説明可能な範囲を広げる応用研究というよりも、そもそも、問題としての言葉に寄り添った言語哲学の展開が可能であることを示している。(すでに同趣旨の『バッド・ランゲージ: 悪い言葉の哲学入門』(ハーマン・カペレン、ジョシュ・ディーバー 2022)が翻訳で刊行されている。)私はここに、哲学の問題を哲学の問題として立ち上げるためにはフェミニズム的視点が必要なのだ、という展望を見てとる。

本書は、哲学の専門家にとってだけでなく、非専門家や初学者にとっても魅力的なフェミニスト哲学の入門書となっている。とはいえ、一冊で、フェミニスト哲学の現在を語り得ているわけではない。本書には、フレンチ・フェミニズムの成果

があまり積極的に取り上げられていない。(訳者に横田祐美子氏が加わっているのも、読者は、横田氏の研究に目を向けることでフレンチ・フェミニズムへと接近可能ではある。)また、哲学の正典をフェミニズムおよびポスト・コロニアル的な観点から読み直す試み(よく知られているのは、ペンシルヴェニア大学出版局による「フェミニスト解釈」のシリーズである)も、無視されている。しかしながら、本書がこれらの課題に対してそれほど重い責任を負うとは思われない。今後、類似の書籍が出版され雑誌特集が組まれることで解決されれば構わないだろう。

最後に、よりプラグマティックな観点から、本書がもたらす希望について述べておきたい。ノンバイナリーおよびバイナリーの女性(シス・トランスを問わない)は、しばしば「女性哲学者」と呼ばれる。この呼称は、そうした人たちが、真性の「哲学者」(ここには「人間」という言葉を置き換えることもできる)ではないために、例外的に知性を持った存在であることを証明してきた／せざるを得なかったし、これからも証明し続ける必要があることを示唆している。このことは、「アジア系の哲学研究者」という呼称についても言えるだろう。本書の刊行に続き、フェミニスト哲学の展開が本邦において活発となることで、いつか私を含め、アジア系の女性とみなされる哲学者が、自身の知性を証明し続ける負の連鎖から解放されることを望む。

#### 参考文献

- Austin, J. L. 1975. *How to Do Things with Words*, Second Edition, Harvard University Press. (坂本百大訳, 1978, 『言語と行為』, 大修館書店.)
- Cappelen, Herman and Dever, Josh. 2019. *Bad Language: Contemporary Introductions to Philosophy of Language*, Oxford University Press. (葛谷潤・杉本英太・仲宗根勝仁・中根杏樹・藤川直也訳, 2022, 『バッド・ランゲージ: 悪い言葉の哲学入門』勁草書房.)